

『碧の岬の手紙屋さん』

作・演出 春田鮎



登場人物

トト・・・岬で手紙屋を営む少女
ノア・・・トトの姉 誰にでも優しい
ヘス・・・メイドの少女 年を取らない 478歳
ビーナ・・・酒乱の女 男からの手紙を待ち続けている
金子(きんこ)・・・大金持ちの養女 遺産の相続問題に悩む
銀子(ぎんこ)・・・金子の妹
ララ・・・余命1ヶ月の女性
パドル・・・道に迷った芸術家
サファイア・・・黒い影
ルビー・・・黒い影

海の女神・・・岬に伝わる伝説の女神

トロイ・・・女神に恋する男

ターシャ・・・トロイが愛した女性

マーサ・・・村の女

アンヌ・・・マーサの長女

カイン・・・村の男児双子の兄

レオン・・・カインの双子の弟

子供時代のノア

ヤチムン・・・西のはずれに住むお年寄り

ナナ・・・ヤチムンの娘

ナレーション

○誕生

岬に遊びに来ているマーサとアンヌ。マーサの子供の双子の兄弟が走り回っている。

カイン「ほーら！追いついてみるよ！レオン！ノア！」
ノア「負けないわよ！それ！」

レオン「待ってよ、カイン！そんなに早く走れないよ！」

アンヌ「ほら、カイン！レオン！気を付けないと海に落っこちちゃうわよ！」

ノア「ほら、追いついた！もう逃げられないわよ！」

カイン「ふんだ！ここまでおいで！」

レオン「カイン、危ないよ！そんなところ立ったら本当に落っこちちゃうよ！」

カイン「平気だよ！ほら、見て見て！」

マーサ「やめなさい！カイン！早く降りなさい！岬の女神が怒るわよ！」

カイン「岬の女神？なにそれ？そんなの全然・・・わ、おっと、あああ、うあー！」

マーサ「キヤー！」

ノア「カイン！」

カイン「ふー・・・へへへ、ノア、サンキュウ」

アンヌ「カイン！（カインの頭を殴る）」

カイン「痛ってー！何すんだよ、アンヌねえちゃん！」

レオン「(泣き出す) ふ、ふええ、うあーん！」

カイン「なんで、お前が泣くんのだ？」

レオン「恐かったよー！カインが死んじゃうかと思ったよー！あーん！」

ノア「ごめんね、わたしが追っかけたから、ごめ、ごめんなさい！（大泣き）」

マーサ「ほろほら、レオン、ノア。もう大丈夫だから、泣くのはおやめ」

レオン・ノア「ひっく、ひっく・・・」

どこからかまだ泣き声が聞こえてくる。

アンヌ「レオン、いい加減泣くのはやめて。男の子でしょ？」

レオン「僕、もう泣いてないよ」

ノア「私も泣いてない」

カイン「ポストが泣いてる」

マーサ「え？・・・本当だわ。ポストの中か聞こえるわ」

アンヌ「どういうこと？」

マーサ「ヘス！ヘスはどこ？」

家から出てくるヘス。

ヘス「はいはい、マーサ、にやによ、大きな声出して」

マーサ「ヘス、ポストの中から泣き声が聞こえるのよ」

ヘス「え？なんだって、本当かい？」

アンヌ「ヘス、とにかくポストを開けてみて」

ヘス「あ、ああ・・・鍵、鍵・・・あった、よいしょっと」

ポストが開く音。

カイン「わー！赤ん坊だ！ポストが赤ん坊を生んだ！」

マーサ「ヘス・・・どういうこと？」

ヘス「・・・新しい手紙屋が来たんだよ」

ノア「ヘス、この子、だれ？」

ヘス「あんたの妹さ」

M 「碧の岬の手紙屋さん」

着飾った男女が集う碧い岬。

華やいだ雑談が飛び交う中、響き渡る祝福の鐘の音。

そしてウエディングマーチにのって新郎モンザ(モブ)と新婦ビーナが現れる。

参列者たちは口々に祝福をのべる。

ノア「おめでとうビーナ！」

トト「ビーナ！幸せになってね！」

ヘス「何言ってるんちよ！？なるに決まってるんば！ねえ、ビーナ！」

トト「そっか！なんてったって、ビーナはジューンブライドだもんね！」

○岬

N「ここは、ポストのある不思議な岬。古いカシノキの梢の庇の下には木のテーブル。白い洗濯物が風にたなびいている。この岬には不思議な力を持った女の子トトが、姉のノアとお手伝いのヘスの3人で暮らしてる。今日も釣竿を持ったまま居眠りをしているヘス。魚がかかり飛び起きたが逃げられた様子。ヘス、そろそろ、トトが帰って来るはずよ」

M ヘス 「潮風に運ばれて」

そこに大きな小包を抱えたトトが帰ってくる。

トト「ただいま」

ヘス「おかえりっちえ？どすたのその大つきい荷物」

トト「はあ、疲れた。西の外れのヤチムンさん」

ヘス「ああ、ありやか。一日中土くれいじって、皿かキョーヒーキャップかわからんような物こさえてる。南の島生まれで、一見癒し系じい気取っちよきながら、隙見ではケツケツしやわろうとする野蛮人ね。人によんで、エロ髭危機一髪！？びによーん！」

トト「あははは！でも近頃はさ、足がますます悪いみたいで、この岬まで登ってこられななんだって。だから仕方なく私が集荷」

ヘス「集荷料金もらっちゃうの？」

トト「えー、そうもいかないよ。長い付き合いだし」

ヘス「あまーい！あみやいよ、あみやいよ、トトは甘すぎるよー！」

トト「だって・・・いいよ、別に。誰かが誰かに届けたいものがあるなら、あたしは一生懸命届けたいの。だってそれって、思いを届けるってことでしょうか？なんかすごい仕事だ」

って思えるんだ。だから少しくらい重くたって」

ヘス「(しくしく) えりゃい！立派に育つちえくれちえ、ヘスはヘスは！(号泣)」

トト「泣かないでよ、ヘス」

ヘス「ところでエロ髭危機一髪は、にやにを送りちやいんだって？」

トト「早・・・気持ちの切り替え3才児並みね」

ヘス「当たり前にやる。400年以上も生きてたら、感情の起伏、雑ににやるよ」

トト「そう・・・荷物はねえ、3ヶ月分の手紙よ」

ヘス「3ヶ月分？にやんで3ヶ月分もまとめて出すによよ」

トト「毎日書きたいんだって」

ヘス「毎日？」

ヤチムン家の回想・・・・・・・・・・

ナナ「すまないわねえ、トト。ほら、お父さんもちゃんとお礼言って」

ヤチムン「ん？んん・・・すまん、トト」

トト「うん」

ナナ「町で一緒に暮らそうって言っても聞かないのよ」

ヤチムン「町は嫌いだ。海が見えん」

ナナ「こればかり」

トト「あはは」

ナナ「切手代、次の分も前払いしておくわね」

トト「ありがとうございます」

ナナ「こんなに手紙ばかり書いて・・・たくさん書きたい日もあれば、一言だけの日もあ
るらしいけど、毎日、毎日、今日はこんなことがあったよ、今日もがんばったぞって、死
んだ兄さんに伝えたいらしくて」

ヤチムン「ヘスは元気にしてるのか？ほれ」

トト「キヤ！もうヤチムンさん、おしり触らないですよ！二度と集荷に来ないわよ！？」

ヤチムン「ははは、すまんすまん。少しは女らしくなったかどうかチェックしとかんとな」

ナナ「はあ、まったく・・・トト、ごめんなさいね」

トト「もう慣れましたけど。ヘスは元気よ。ヘスも会いたがってた」

ヤチムン「生きてるうちにまた、岬のテーブルでチェスをしようと言っておいてくれ」

トト「わかった」

ヤチムン「と言っても向こうは死にはしないのか(笑)」

ナナ「おとうさん」

・・・・・・・・・・・・・・・・

トト「毎日。たくさん書きたい日もあれば、一言だけの日もあるらしいけど、毎日、毎日、
今日はこんなことがあったよ、今日もがんばったぞって、息子さんに伝えたいんだって」

ヘス「へえ」

トト「それに、書いたそばから出していると、集荷にいく私にも悪いからって。だから3ヶ
月ごと、1年に4回、嵐で亡くなった息子さんに手紙を出すの。今日のはほら、初夏の便
ね。へえ、ああ見えて素敵な封筒じゃない？」

ヘス「本当ら。かわいいところあるじゃん、エロ髭も」

トト・ヘス「(笑)」

大事そうに手紙をポストに入れていくトト。
そこにひどく酔ったビーナが入ってくる。

トト「ビーナ！」

ビーナ「ハローハロー、コマンタレプー、手紙屋さん！」

ヘス「うっ！酒くつしやい！」

ビーナ「これはこれは478才の甘えんぼちゃん」

ヘス「ヘスでちゅ！年上は敬いしやいよ」

ビーナ「ふん！ただの死に損ないじゃない」

トト「ビーナ！」

ヘス「なんだつちえ・・・もういつぺん言つちえみなしやいよ！この口きや！？え？この口きや！？」

トト「やめて、ヘス！お願い！やめて！」

騒ぎを聞いて家から出てきたノア。

ノア「どうしたの！？ヘス、やめて、やめなさい、ヘス！」

ヘス「だって、こいつが、この女が！」

ビーナ「なによ、あたしが何か嘘でもついた？」

ノア「ビーナ、あなたまたお酒を・・・」

ビーナ「本当のことじゃない。この甘えん坊ちゃんが478年間も、死ぬに死ねない不老不死の怪物だっことはさ。どういう分けか知らないけど、あんたたち姉妹（きょうだい）もやっかい女をお手伝いに雇ってさ、いい気なもんよね、死んだもんと生きてるもんの手紙のやり取りでおまんま食ってさ」

ヘス「トト達は、切手代しかもらつちえにやいよ！ずるしてるみたいに言うにや！」

ビーナ「うそ！あたし知ってるわ。野菜や卵、時にはホロホロ鳥のスモークなんかももらっているでしょ？」

ノア「それは皆さんの好意で」

ビーナ「そう、好意、優しいさ、慈しみ、そんなものが何になるの？気持ちなんて不確かなもの、本当かどうかも分かりやしないじゃない。私にはもう何ひとつ意味のないものよ」

M ビーナ 「あの人のいない世界」

歌い、泣き、お酒が覚めてきて正気を取り戻してくるビーナ。

ビーナ「あら・・・いけない・・・ごめんなさい・・・あたし、またお酒を飲んでしまったのね・・・みんな、許して」

ノア「いいのよビーナ」

ヘス「ノア！優しいしゅぎ！いくら結婚してしゅぐに旦那が死んだからつちえ、もう3年よ！いつまでもそんなじゃ、死んだモンザが心配で生き返っちゃうよ！」

ビーナ「ヘス・・・それ本当！？」

ヘス「おっと、いや、それは言葉のアヤヤで（アヤヤの物真似）」

トト「ヘス、やめて」

ビーナ「・・・ごめんね、甘えん坊ちゃん。あなたの言うとおりだわ。そうよね、もう3

年も経ったのよね・・・トト」

トト「なあに？ビーナ」

ビーナ「手紙を。あの人にこの手紙を届けて。最後の手紙よ・・・もうこれで全部、あきらめるから・・・お願いね」

肩を落として去っていくビーナ。

ヘス「はぁ・・・これで何度目の最後の手紙？」

ノア「つらいのよ。待つてあげましょうよ、本当の最後の手紙が出せるまで」

トト「3年前の結婚式じゃ、あんなに幸せそうだったのに・・・」

ノア「かわいそうなビーナ。まさか自分がこの真実のポストに手紙を投函する日がくるなんて、思ってもいなかったでしょうね」

ビーナの手紙をポストに投函するトト。

ノア「待つているのに夫からの返事は来ない。でもあんなにお酒を飲んでたら、いつか体を」

トト「大丈夫だよノア。きっと返事はくるよ。そうしたらビーナだつてきつと」

そこに見知らぬ女性（ララ）がキョロキョロしながら訪ねてくる。

ララ「あの」

ノア「はい」

ララ「ここは真実のポストがある岬ですか？」

トト「ええ、そうですけど」

ヘス「何か御用？あ、お客さん？」

ポストを見つけて駆け寄るララ。

ララ「これね？これが真実のポストなのね？あぁ・・・」

ヘス「どうしたによ？」

ララ「良かった・・・本当にあつた・・・これでもう大丈夫。あぁ、本当に良かった」

トト「あの、何かご事情がおりなら伺います。さっ」

ララ「・・・いけない、私ったら嬉しくてつい・・・ごめんなさい」

ヘス「別にかまわにやいけど、ポスト抱きしめて泣いた人、478年間ではじめてよ」

ララ「478年間？」

トト「いいのいいの、気にしないで」

ヘス「なにゆお？」

ノア「ストップ。お客様の前よ」

ヘス「・・・」

トト「ごめんなさい。どうぞ掛けて」

ララ「ありがとう」

ノア「それで、このポストが何か？」

ララ「はい。このポストが、死んでしまった者へ手紙を届けてくれるっていうのは本当で

すか？」

トト「はい。届けられます」

ヘス「返事も来るわよ」

ララ「まあ・・・」

トト「ただしひとつだけルールがあります」

ララ「ルール？」

トト「(うなずく) このポストに投函する手紙には、真実しか書いてはいけません。嘘、偽りをかいた者にはどんな罰が訪れるかわかりません」

ララ「今までに嘘を書いた人はいるんですか？」

トト「(首を振る) わかりません。少なくとも私が知る限りは。ね？」

ノア「そうね。私たちは知りません」

ヘス「しよれよりも、どうしてこのポストを？」

ララ「隣村に住む遠い親戚に、ロバーニという男がいるんですが、その男は親類縁者に借金を重ねたり、家宝を勝手に売り飛ばしたりするんで皆からは倦厭されているんですが、何か妖しい情報なんかには精通していて。あ、ごめんなさい！妖しいだなんて。そんなつもりで言ったんじゃないや」

トト「大丈夫ですよ。続けて」

ララ「はい。つまりロバーニは、消えた王家の財宝の在り処とか、若返りの泉が湧く幻の森とか、そういった話に詳しくて。藁にもすがる気持ちで相談に行ったら、この、真実のポストの話を教えてくれたんです」

トト「誰か、手紙を出したい人がいるんですか？」

ララ「はい・・・でも、私は、私が死んだ後に、生きている子供に手紙を出したいんです」

ノア「自分が死んだ後に？」

ララ「はい。私は、私が死んだ後、料理も洗濯もしたことがないあの子が、一人きりでひどく困るんじゃないかと思うと心配で心配で・・・」

トト「でも、それを今から心配しても」

ララ「1ヶ月」

ノア「・・・1ヶ月？」

ララ「(うなずき) 私の命、あと1ヶ月なんです。医者に言われました。だから、今のうち手続きを済ませておこうと思って、ここまで来たんです。目玉焼きの作り方とか、洗濯物のたたみ方とか、色々、色々、手紙で教えることが出来れば、少しは安心だなんて」

トト「・・・わかりました。でも、特別に手続きなんてないんです」

ララ「え？じゃあ、どうやって手紙を出したら・・・」

トト「もしあなたが亡くなったら、この岬に来て、子供さんから先に手紙を出すように頼んでおいてください。そうしたらあなたは返事が書けるでしょう？そのあとはお互い好きな時に手紙を出し合えば」

ララ「よかった。ありがとう(トトの手を握る)・・・よかった・・・」

トト「だけどあきらめないで、まだあきらめたりしないで・・・ね」

ララ「・・・はい」

M ララ 「母の思」

帰っていくララを見送る3人。

○姉妹

テーブルを囲み真剣な面持ちで手紙を読む、宝船家の姉妹、金子と銀子。そしてトト。

N「今日の客は少し厄介。テーブルを囲み真剣な面持ちで手紙を読む、宝船家の姉妹、金子と銀子」

金子「これは本当に父からの手紙なの？」

銀子「たしかに！だってこの手紙の内容、おかしいよ！」

トト「そう言われても・・・これは真正銘、金子さんたちのお父様からの手紙です」

銀子「どうもいまいち信じらんないんだけど」

テーブルの下（クロス下）から飛び出てくるヘス。

ヘス「信じるかどうかは、あなた次第です」

銀子「あんたどっから出てくんよ!？」

ヘス「テーブル（ふざける）」

銀子「なんかムカつく!」

ヘス「嘘つきにムカつかれても平気だみよーん」

銀子「ちよつと！なんであたしが嘘つきなのよ!？」

ヘス「あんたじゃにやいよ。この人」

金子「なによ!？」

ヘス「どーもあんたは胡散臭しやい」

金子「失礼ね!」

トト「とにかく、お父様からの手紙は渡しましたから（はあ）」

金子「だっておかしいわよ、遺産は全て寄付しろだなんて!」

銀子「そうよ、何のためにここまで苦労して!」

金子「銀子!」

銀子「あ!・・・ごめんなさい」

ドアが開き、ノアが顔を出す。

ノア「トト。あら金子さん、銀子さん、いらっしやい」

トト「どうしたの?ノア」

ノア「なんだかオーブンに上手く火が入らなくて」

トト「ああ、それはね。OK!あたしがやるわ。ヘス、薪を少し持ってきて」

ヘス「わかったにょん」

トト「それじゃ金子さん、また手紙が届いたらお知らせします。お父様に手紙を出すならポストに入れておいてください。真実の切手はまだありますか?」

金子「ええ。大丈夫よ」

トト「よかった。じゃあ」

ヘス「しっちゅれい!」

N「トトとノアはため息をつきながら家に入り、ヘスは薪拾いに出かけて行った」

銀子「だけど、どうしてお父様は今になって遺産の全てを、恵まれない人たちに寄付しろだなんて言い出したのかしら？」

金子「そこなのよ。わたしたちには感謝してわ。孤児だった私たちを引き取って養子として育ててくれたことには感謝してわ。だから・・・だからこそ、私たちと同じ天涯孤独だったお父様に対して、本当の娘以上に尽くしてきたつもりだった。それなのに、今さら遺産をあきらめろだなんて！どう考えても納得できないわ」

銀子「でもどうするのよ？屋敷の地下には、お父様が一代で築いた財宝が眠っているのよ！こうしてる間にも私たちが来るのを待っているはず！」

金子「死んだ人間に手紙が届くポストがあると聞いて、やっと見つけたこの岬。手紙を出して、地下室の扉の暗証番号を聞きたかっただけなのに、なぜあんなひどいことをいうの！？お父様は私たちを可愛くないのかしら？入口は一カ所、原爆でも破壊できない強固な作り、中には金銀ダイヤ！株券、債券、万馬券！あく（ふらふらつと）」

銀子「落ち着いて姉さん。今はそんな感情的になってないで、とにかく扉の暗証番号よ！」

金子「そうね・・・そのとおりね・・・」

M 金子・銀子デュエット歌「金銀マネー」

金子「そうだ、分かったわ！なによ簡単じゃない」

銀子「なに？何が分かったの？姉さん」

金子「手紙を書きましょう」

銀子「誰に？」

金子「決まってるじゃない、お父様によ」

銀子「お父様に？」

金子「（うなずき）わかりました。全て寄付しますって」

手紙を書き、ポストに投函する金子と銀子。踊り続ける二人。

○迷い人

N「今日は少し風が強い。トトが庭で片づけをしていると、そこに碧い服を着た旅人風の男（パドル）が訪ねてきた」

パドル「すまないけど、水を一杯もらえませんか？」

トト「（とても驚く）」

パドル「？・・・だめですか？」

トト「いえ・・・あの、はい、かまいませんが、どうかされたんですか？」

パドル「いや、たしたことはないんだけど少し目まいが」

ふらつくパドル。それをあわてて支えるトト。

トト「いけない！大丈夫！？どうしよう・・・ヘス！ヘス、いないの！？ノア！？姉さん！？もうこんな時に限って誰もいないなんて」

パドル「大丈夫・・・少しここで休ませてもらえれば・・・多分少しだけ、お腹が・・・」

トト「お腹が・・・？」

パドル「・・・実はもう3日ばかり何も食べていなくて」

トト「ええ！3日も！？どうしてそんな」

パドル「恥ずかしい話なんだけど、僕はひどい方向音痴でね。道に迷って疲れて眠ってしまい、気が付いたら食糧や衣服、それから画材道具なんかも一切合切入ったカバンが・・・消えていたんだ」

トト「盗まれちゃったの？」

パドル「たぶん。当てもないまま探し続けて今日で3日目」

トト「それでこの岬に？」

パドル「まったく馬鹿だよな、絵の道具がなけりゃ1ペニーだって稼ぐことが出来ない。旅を続けることが出来ないってのに」

トト「絵描きさんなの？」

パドル「ああ。日のあるうちは人通りのある場所で、似顔絵なんかを描いて稼ぐんだ。でも本職は、っていうか一番好きな仕事は彫刻さ」

トト「ああ、知ってる！ミケランジェロとか、考えてばっかりの人？」

パドル「考える人。ロダンだろ？」

トト「そうそう！つまりそういう彫刻？」

パドル「いや、僕がやっている彫刻は、主に教会の聖堂を飾る装飾を作る仕事で、天使やマリア像なんかを彫ってるんだ」

トト「へえ、なんだか大変そう」

パドル「まあ、石だから硬いし、失敗したら元には戻せないからね」

トト「失敗したりもするの！？」

パドル「そりやするさ。今はだいがましになったけど、最初の頃は毎日、親方にどやされっぱなしで、ひとつの小さな天使を完成させるまでに半年もかかってたよ」

トト「半年も！？」

パドル「ああ。だけど完成して、自分の作った彫刻が、美しい聖堂と一つになったのを見たら、苦労も何もかもいっぺんに吹き飛んでしまうんだ」

トト「本当に彫刻が好きなのね。でも自分の作品を、これ自分が作ったんです！って威張ってみたくなったりはしないの？」

パドル「それはないな。僕はなんていうか、芸術家じゃないんだよ、多分」

トト「じゃあ、何？」

パドル「職人、かな」

トト「へえ」

パドル「君は？」

トト「私？私は・・・手紙屋」

パドル「手紙屋？ずいぶん変わった仕事みたいだね」

トト「そうね、ひどく変わってるのかも」

パドル「よかったら、聞かせて」

トト「私はね」

そこに大きなカバンを抱えたヘスが返ってくる。

ヘス「ひやー、なんだか暑くなってきたわにえ。6月だっていうのに今日はまるでハワイみたいに太陽があたしをいじめるよ。ワイハ、行ったことはやいけどね（笑）。一句出来

た！ワイキキでわからぬことはワイに聞きや！（笑）」
トト「ヘス、どこ行つたのよ！」
ヘス「ちよいとそこまで、夢を探しに・・・あんた誰？」
パドル「それ、僕のカバン！」
ヘス「へ？」
トト「・・・ヘス！？」
ヘス「ぬぬぬ！」

カバンが戻つてきて、食料を夢中で食べるパドル。その横で言い合いを始めるトトとヘス。

ヘス「だから誤解だつちえ！何度言わしえれば気がすむによ！？このカバンはハチミツを取りに行つた崖に生えてる枝にぶら下がつたの！」

トト「本当？」

ヘス「ホントもホント！嘘だと思ふなら、ミツバチたちに聞いてみりよ？ぶんぶん言つて首ふるから」

トト「たてにぶんぶん言うかもしれないじゃない」

ヘス「ばかばかばか、ぶんぶん言うちやら横やろもん」

トト「わからないわよ、縦にぶんぶん言つてるのかも」

ヘス「あほあほ、トトは何にもわかつてにやい！」

トト「ヘスだつて！」

ヘス「こらー、あたしや今年で478よ。あんたの460歳も年上よー」

トト「わたし、もうちよつと大人ですー！」

ヘス「かー！可愛げにや！」

トト「そつちこそ、強情つぱりの年寄り供！」

ヘス「によー！言つていいことと悪いこともわからんかー、この口か！この口が言うか！？」

トト「痛い！ヘス！やめて！ヘス！」

パドル「あの！」

トト・ヘス「？」

パドル「おかわりありますか？」

ずっこける二人。

ヘス「だけどトト、ずいぶん楽しそうだね」

トト「そう？別にいつも通りよ」

ヘス「そうかにやー？いつもよりなんか女子な感じ」

トト「ばっ、なに言つてんのよ」

ヘス「そりやそうよね。年の近い、こんな素敵な男の子、ここじゃ全然会わないものね」

トト「そんなんじや、私はただ、彼がお腹を空かせて困つてたから」

ヘス「おー！早くも胃袋押さえた！えらいえらい、昔からね、人生には三つの袋があると」

パドル「それ、知ってる！たしか東の端の島国の結婚式で語られるっていう」

トト「結婚式！？」

ヘス「おや？どうしたによ？なんだか顔が赤いよ」

トト「もー！ヘスー！」

ヘス「OK、OK！恋だね」

トト「ちょ！恋なんかしてません！」

ヘス「バーカ！恋はするんじゃないよ、落ちるもんなんだよ」

M トト・ヘス・パドル「やまご」

パドル「ところでさつき言っていた手紙屋っていうのはどんな仕事？」

ヘス「なじえそれを！」

トト「私が話したのよ」

ヘス「あらまあ！」

パドル「郵便屋とは違うのかい？」

トト「うん。私は手紙専門。しかもその手紙は」

そこに帰って来たノア。

ノア「それ以上は話してはだめよ、トト」

トト「ノア」

ノア「忘れたの？トト」

トト「・・・忘れたわけじゃないけど」

ノア「だったらこの話はもうおしまい。いい？」

トト「はい。姉さん」

ノア「ヘス、お客様を部屋の中へご案内して」

パドル「いや、僕は」

ノア「もうすぐ日が暮れるわ。今から街には戻れないから」

パドル「大丈夫ですよ。男だし」

ヘス「コヨーテは男も女も関係にやいわよ」

パドル「コヨーテ・・・」

ヘス「ガブッ！」

パドル「うわー！」

ヘス「(大笑い)さ、こっちこっち。そうだ、アタシの似顔絵描いてよ。ね？いいでしょ？」

トト達を気にしながら家に入っていくパドル。

ノア「トト、気を付けなければいけないわ」

トト「わかってる」

ノア「わかってないじゃない。あなたは明日の夜、20歳になるのよ」

トト「わかってる」

ノア「トト・・・」

トト「・・・もう、うるさいな、わかってるってば」

ノア「私はあなたのためを思って」

トト「いいじゃない、たまには。私だって色んな人と話をしたいし、知らない国の話や、見たことのない物を見てみたいの」

ノア「でもあなたは」

トト「私にはポストがあるって言いたいんでしょう？わかってるわよ、手紙を待ってる人に

届ける仕事があるってことは」

ノア「だったら」

トト「でも、どうして？どうして私はこの岬から離れてはいけないの？行ける場所といえ
ば、ヤチムンさんの家までがやっとで、姉さんみたいに街にも行けない。こんなあんな
りよ、ひどすぎる。．．．あーあ、私、もう手紙屋なんてやめちゃおうかな」

すねて去っていくトト。

ノア「トト．．．」

そこに金子と銀子が現れる。

金子「反抗期？」

銀子「ちよつと遅くない？」

ノア「．．．」

金子「わかるわ、同じ姉として。お互い妹には手を焼くわよね」

銀子「ひどーい、金子ねえさん」

金子「ところで、しばらくここでお世話になってもいいかしら？」

ノア「え？」

金子「実は父に手紙を出したのよ」

銀子「私たち、父の遺産を全部、寄付する決心をしたの」

ノア「まあ」

金子「だから、地下室の扉の暗証番号を教えてって」

銀子「えらいでしょ？私たち」

ノア「それが本当なら素晴らしいけれど」

金子「本当に決まってるじゃない。今のところはね」

ノア「今のところ？」

銀子「人間、いつ気が変わるかはわからないってこと。ねえ、金子姉さん」

金子「こら、銀子。悪い子」

金子・銀子「(大笑い)」

金子「うまくいったら、たんとお礼するからこれでしばらく面倒みてちょうだい」

金を投げてよこす金子。勝手に家へ入っていく二人。

金子「あ、そうそう、朝食は食べない主義だから気にしないでいいわ。そのかわり、ブラ
ンチはフルーツをたくさんお願い」

銀子「あたしはお肉ならいつでもOKよ。ザ、肉食系女子！」

ノア「あ、でも」

金子「いいから、いいから」

ノア「あの」

金子「あんたさ、暗い顔ばっかしてないで、そのくそまじめなつままない人生にグッバイ
してさ、どっかでもいい男つけてこんな所捨てて逃げちゃいなさいよ。人生は一回きりよ」
ノア「．．．」

○伝説

パドルが庭で一人、破れた服を繕っている。

N「一晚を岬で過ごした。パドルが、破れた服を繕っている。ノアが洗濯を干しに出てきた」

ノア「・・・おはようございます」

パドル「やあ、おはよう。突然お世話になってしまっでごめんなさい。ご迷惑おかけしました」

ノア「いえ、別に迷惑だなんて」

パドル「しかし気持ちのいい岬ですね。こんな碧い空を見たの初めてです」

ノア「・・・碧い手紙に真実の愛を・・・」

パドル「え？」

ノア「あ、この辺りの古い伝説があつて・・・」

パドル「聞きたいな。よかつたら話して」

ノア「・・・ある男が海に住む女神に恋をしてしまったの。女神は男の気持ちを試すためにこう言った。毎日、あなたの愛を碧い手紙にしたためて海に流しなさい。いつの日か、あなたの愛を信じる事が出来たら私はあなたの妻になりましょうって」

海の女神の伝説・・・・・・・・・・

女神「毎日、あなたの愛を碧い手紙にしたためて海に流しなさい。いつの日か、あなたの愛を信じる事が出来たら私はあなたの妻になりましょう」

トロイ「本当ですか！？約束します！私は毎日必ず、あなたへの愛を手紙に書きます。何日、いや何年かかっても、あなたを妻にする日まで！」

女神「わかりました。ただし、決して嘘は書かないでください」

トロイ「もちろんです。あなたに永遠の愛を誓います」

ノア「男は毎日、毎日、一生懸命、女神への愛をつづつたわ。毎日、毎日。何カ月も何年も。だけどある日、男はある女性と出会ってしまふ。その女性に心惹かれてしまった男は、女神に嘘の手紙を出してしまうの。“あなたのことは心から愛しているが、やはりかなわぬ恋とあきらめることにしましう。さようなら”って」

ターシャ「トロイ、私、あなたに出会えて本当に幸せよ」

トロイ「僕もだよ、ターシャ」

ターシャ「私たち幸せになれるかしら？」

トロイ「もちろんだよ。君のためなら僕はどんな困難だって乗り越えてみせる」

ターシャ「うれしい」

トロイ「ターシャ」

M トロイとターシャ『海の女神の伝説』

ターシャ「そうだ、トロイ、今度の休みに二人で海を見に行きましょうよ」

トロイ「え？海？・・・僕は山に行きたいな」

ターシャ「どうして？海は嫌い？」

トロイ「嫌いじゃないけれど、なんとなく・・・」

ターシャ「嫌よ、私、海が見たい。昔からなぜだか海が大好きなの。ね？決まり！私、うんと腕を振るってランチの準備をするわ」

トロイ「ターシャ・・・」

N「しかしこの海へのデートが二人の運命をひきさくことになるうとは」

女神「トロイ、お前は私に嘘をつきましたね」

トロイ「お許しを！どうかお許しを！」

女神「私への永遠の愛を誓いながら、私を裏切った報いを受ける覚悟はあるのでしょうか？」

ターシャ「トロイ、助けて！海が・・・波が！」

トロイ「わあー！」

ノア「男の嘘を知った女神の怒りは嵐を呼び、海は荒れ大波が二人を飲み込み、男は帰らぬ姿となった。女神はターシャを生かしたが、二度と恋が出来ないよう永遠のまじないをかけた。た。愛する者を失った苦しみを与え続けるために」

・・・・・・

ノア「そして いつしか、男の流し続けた幾千もの手紙の碧い色が海に溶けて空に映り、この岬の空はこんなに碧くなったんですって」

パドル「へえ・・・悲しいけど、美しい話だね」

ノア「ええ。碧空は大好きだけど、空が碧すぎて、泣きなくなるときってない？」

パドル「ある」

ノア「ふと気が付くと、どうしようもなく一人ぼっちを感じてしまう・・・そんな空の碧さ・・・」

パドル「だけど、今はこうして、僕たちはいつしよにいるよね」

ノア「・・・」

パドル「人間が孤独な存在なのは分かるけど、そんなに寂しい目をしないで。笑った方がきつと、今日が昨日より素敵だよ」

ノア「(焦) いけない、洗濯物途中だった」

繕い物を再開するパドル。

指に針を刺す。

パドル「痛て！」

ノア「どうしたの？」

パドル「いってー・・・慣れないことはするもんじゃないな」

ノア「代わるわ」

パドル「え？」

ノア「ここを縫えばいいのね」

パドル「悪いよ。これだけ世話になって裁縫までさせたりしたら」

ノア「男の人がそんな手つきで繕い物をしていたら、気になって仕事にならないわ。いいから、任せて」

パドル「はい・・・それじゃ、お願いしようかな。そうだ、変わりに洗濯物を干すよ！」

ノア「え！？いい・・・ちよつと、ねえ、そんなこといいから」

パドル「気にしない気にしない、お互い様だろ。それに協力し合えば早く終わって他に何

か楽しいことが・・・あれ？なんだろうこれ？」

洗濯物の中から、下着のようなものを引つ張り出すパドル。

ノア「あー、それはだめ！」

力づくで取り返し、他の衣類をパドルの顔めがけて投げつけるノア。

パドル「・・・ごめん」

ノア「・・・あ、私のほうこそ・・・」

徐々に笑いあう二人。笑いあいながら、ノアは裁縫、パドルを洗濯干しを再開する。すると空が一転にわかには掻き曇り、雷が鳴り出す。

パドル「どうしたんだろう？あんなにいい天気だったのに」

ノア「岬の天気は変わりやすいの・・・嵐にならなければいいけど」

突然、大きな雷鳴がとどろき、大粒の雨が降り始める。

ノア「あー、せっかく干した洗濯物が！」

パドル「急いで取り込もう！」

ノア「ええ！」

叫び声を上げながら、それでもなぜか楽しそうに片づけをする二人。雷はどんどん近づいてくる。

○誕生日

洗濯物を抱え、笑いながら家に逃げ帰ってきたノアとパドル。と同時に、部屋に来るヘス。

ヘス「ひー、ちゃすけちえー！雷きよわいー！ナンマンダブナンマンダブ、アーメンソーメンヒヤラーメン！神様、仏様、和田アキ子様ー！ヘスは雷が一等嫌いなんでしゅー・・・たしけちえ・・・」

ノア「ヘス、大丈夫？ヘス」

ヘス「ノア」

ノア「大丈夫よ、この岬に雷が落ちたことなんて今まで一度だって」

強烈な落雷の音。

ヘス「・・・落ちとるやんか・・・」

ノア「・・・ははは」

部屋に入ってくるトト。元気がない。

ノア「トト」

トト「……………」

ヘス「どうした？トト。具合でもわりゆいのか？」

パドル「本当だ、なんだか顔色が悪い。ほら座って」

トトに手を貸して座らせるパドル。それを見るノアの目。二人の様子を伺うヘス。

さらに激しい雷鳴と雨音に大騒ぎしながら部屋に飛び込んでくる金子と銀子。

金子「ちよつと何よこれ！聞いてないわよー！」

銀子「びりびりするー、さっき落ちた雷がびりびりきてるー！」

ヘス「そりゃいいね、肩こりに効きそうだ」

金子「憎たらしいガキね、まったく！」

ヘス「478歳でちゅー」

銀子「縄文杉かお前は！？」

ヘス「縄文杉は4000年だみよーん！勉強しろよ」

銀子「いー！くやつしー！」

ヘス「へへへん！」

トト「……………なんだか怖くて」

パドル「怖い？雷がかい？」

トト「ううん、そうじゃなくて……………」

ヘス「今夜が二十歳の誕生日だからかい？」

ノア「ヘス！」

ヘス「まあいいじゃにやいの」

ノア「でも……………」

パドル「誕生日？トトの？」

ヘス「しよう。トトの二十歳の誕生日」

パドル「それはお祝いしなくちゃ」

ヘス「しようだね。パドルの言う通り。お祝いしなくちやいけにやいね」

ノア「ヘス……………」

パドル「……………なにか特別なんですか？二十歳の誕生日が」

トト「……………何かが起きるの」

ノア「トト！」

トト「何が起きるのかは分からないけど……………きつと何かひどいことが」

ヘス「しように限らにやいだろう？もしかして素敵な事かもしれにやいし。何事もポジティブシンキング、ポジティブシンキング」

トト「だって！」

ヘス「トトはね、パドル」

パドル「……………はい」

ヘス「ある時、ポストに届いたの」

パドル「ポストに届いた？」

岬を駆け回る子供達。ポストから聞こえてくる赤ん坊の声。

ポストを開けて赤ん坊を取りだすへス。

へス「天国から届いたのか、それとも誰かが赤ん坊を捨てていったのか？ 良くは分からな
にやいけれど、突然、あのポストの中から赤ん坊の泣き声が聞こえてきちえね、あたしや、
べつからこいたのなんのつて。だけどとりあえずは赤ん坊を救い出して温めてやらなくち
やいけにやいだろう？ 抱き上げてあったかいミルク飲ませて。そしたらこの子笑ったの。
あたしを見てにつこり笑ったんだ。そりや可愛くてね。するとね、この子が何かを握って
るんだよ。赤ん坊とは思えないような力で何かをぎゅつと握ってる。ゆつくりその掌を開
かせると碧い色の手紙が出てきた。そこにはこう書かれていたんだよ。二十歳の晩に……”
その先は忘れちゃったけど」

パドル「二十歳の晩に……その手紙は今もあるんですか？」

へス「いや、ないね。あれ以来一度も見ずにやいわ。騒ぎに紛れて無くなっちゃった。で
もその時から、長い間封印されていた。ポストの力が復活したんだ。トトが新たな手紙屋と
して現れたのと同時にね」

金子「あのポストは封印されていたの？」

へス「ああ、そうだよ」

ノア「復活なんかしなければ良かった」

銀子「なに？ なんか言った？」

ノア「いえ、別に……」

へス「しかし凄い嵐だ。これじゃ帰れやしないから、パドル、もう一晩ここにいておくれ」
パドル「え？ ああ、かまわないけど」

トト「お願い、パドル……そばにいて」

パドル「……わかった。いるよ」

見つめ合い手を取る二人。

ノア「……ちよつと疲れたから横になるわ。へス、後はお願い」

別室へ行くノア。

トト「ノア？……」

へス「それじゃ、何か食べるものを用意しゆるわ。そいでもって今夜は早く休みまちょ」

トト「うん……」

ノアの部屋。

M ノア&トト 「Heart く心の奥の部屋」

暗い部屋で一人椅子に座っているトト。そこにパドルが入ってくる。

パドル「眠れないのかい？」

トト「ううん……眠りたくないの……」

パドル「どうして？」

トト「だって・・・なんだか眠っちゃったら、このまま目が覚めないんじゃないかと思っ
つて・・・」

パドル「馬鹿だな、そんなはずないだろ。大丈夫だよ」

トト「・・・うん、そうね。大丈夫よね、きつと・・・」

パドル「・・・」

トト「ねえ、パドル。お願いがあるの」

パドル「なんだい？」

トト「もし・・・もしもよ・・・今夜、私に何かあって、死んじゃうようなことがあつた
ら」

パドル「馬鹿だな、そんなこと」

トト「お願い、最後まで聞いて！・・・そうしたら、あのポストから私に手紙をくれない？」

パドル「トト・・・」

トト「私、親もないし、姉さんやヘス以外、仲のいい友達もないから・・・ね、お願
い。何でもいいから、時々でいいから、手紙を書いてくれないかな・・・このままパドル
とお別れになるのは、絶対嫌だから・・・お願い・・・」

パドル「・・・わかったよ・・・書くよ。必ず書く。だけどそんな心配いらないよ。そう
だ、ちよつとこつちへ来て座って」

トト「何？どうしたの？」

パドル「今から僕がおまじないをかけてあげる」

トト「おまじない？あなた、そんなこと出来るの？」

パドル「ああ！僕の家は先祖代々続く魔法使いの家系でね。占いや薬を売る商売なんかを」

トト「あれ？絵描きさんじゃなかった？それと、教会の彫刻とか」

パドル「あ、いや、それはなんとというか・・・そう、どっちもやってるんだ！なんせ最近
は物が高くなって働いても働いても足りやしないからね、はははは・・・手を出して」

トト「手？・・・はい」

トトの手を両手で握り額に当て、何かをうなるパドル。

パドル「○×▲βπQ◇◎・・・」

トト「・・・何て言ってるの？」

パドル「(顔をあげて)・・・海の女神様、どうか私の大切な人をお守りください。そう言
ったのさ」

トト「パドル・・・」

パドル「僕が小さい頃、眠れないで泣いてるとよくこうしておまじないをかけてもらつた
んだ。心配ない。僕がついてる。約束したろ？そばに居るって」

トト「・・・ありがとう、パドル」

パドル「トト、君は不思議な人だ」

トト「え？」

パドル「さあ、僕が起きてるから安心してお休み」

トト「うん・・・」

パドルの膝で眠るトト。トトの背中を撫でながら、罪悪感のため息するパドル。

M 「命のロウソク」

○困難

皆、別室で寝静まった中、誰もいない部屋。黒い二つの影が家の中を物色している。そこにパドルが飛びこんでくる。3つの影は、闇の中戦い始める。

M 「サファイアとルビー」

やがてパドルが勝利し、2つの影を取り押さえる。

パドル「静かにしろ！動くんじゃない！」

サファイア「いててて！腕が折れちゃうだろ！」

パドル「やつぱりな・・・」

ルビー「わかったなら早く、そのくさい足をどけてよ！」

パドル「えらそうに！はん！」

手を放してやるパドル。

ルビー「おー、いてえ」

サファイア「同業者に対して手荒すぎるぜ」

蠟燭に火をともしパドル。

パドル「ふざけるな、お前らみたいなコソ泥と一緒にするんじゃないよ」

ルビー「なんだと！」

サファイア「やめな、ルビー！」

ルビー「・・・ちえ」

パドル「何しに来た？」

サファイア「これはこれほご挨拶な。わかってるでしょう？あんたと一緒だよ」

パドル「・・・手紙か？」

サファイア「ビンゴ」

パドル「どこで聞いた？」

サファイア「見くびつてもらっちゃこまるね。アタシたちにだって情報網はあるからね」

パドル「どこまで知ってる？」

サファイア「だいたいはね。アゼル村のロバーニが全部教えてくれたよ。あんたの払った口止め料にちよつと色を付けただけだね」

パドル「あのクソじじい！あれほど他のやつには教えるなと言っておいたのに、裏切りやがって」

サファイア「あんな老いばれ信じてどうすんのさ？碧い空にあてられて、あんたもヤキが回ったんじゃないだろうね？天下の大泥棒、サンチャゴともあろうお方がさ」

パドル「うるせえ」

ルビー「おー、こわ。いいよまた殴っても。そのかわり大声出して、あんたがパドルなんて名前の芸術家でもなんでもないって、あの子にばらしちゃうから。ねー、サファイア」

パドル「チッ！・・・くそっ」

サファイア「こつちも馬鹿じゃないからね。しつかり見せてもらったよ、優しい彫刻家のパドルさん。あーはははは！」

ルビー「(笑)」

ルビーの頭をたたく。

ルビー「いた！」

パドル「それで、どうするつもりだ。手紙はまだ届いてないぞ」

サファイア「そのようだね」

ルビー「だけど本当なの？岬に住む少女が20歳になる夜、天国から届く手紙にかかれた『真実の中の真実』を最初に読んだ者は、全ての困難を解決する力を持つって話」

パドル「さあな。だが、信じないのなら手を引けよ」

サファイア「チツ。ところであんたは、何のために手紙を手に入れようとしてるのよ」

ルビー「アタシはね、スラっとした長い脚にしてみらっつて、そうだな、鼻がやや困難だから、もう少し高くして、目なんかもこうぱつちりと」

パドル「別にいいだろう。お前らには関係ない」

サファイア「金？それとも他に」

パドル「うるさい！」

サファイア「しかし本当にあるのかしら？嘘や偽り、ごまかしと裏切り。そんなやつらばかりのこの世の中に、真実の中の真実なんてものがさ」

ルビー「アタシ・・・もうちよつと頭もよくなりたいたい」

サファイア「(ため息)とにかく、しばし休戦といこうじゃない」

パドル「・・・仕方ないな。手紙を手に入れるまでは、手を組むしかなさそうだな」

サファイア「契約成立。裏切るなよ、サンチャゴ、いやミスター・パドル」

サファイアが差し出した握手を無視するパドル。

そこに寝ぼけながら、ヘスが起きてくる。

ヘス「パドル、何しちえるの？こんな夜中に・・・わ！誰？あんたたち」

ルビー「こんばんは、ミス・ヘス。私たちはかの有名な怪盗ルパン一族を遠い遠い親戚に持つ女泥棒サファイアと妹のルビー」

パドル「イヤ、嘘嘘！何言っつてんだよ、お前！ヘス、あのね、こいつらは・・・そう！仕事仲間！ほら、教会の彫刻と一緒に掘ってる仲間で、俺の帰りが遅いんで心配して探しに来てくれたんだ！こいつがえーと、なんだっけ？」

サファイア「・・・レ、レイクです。それからこの子は・・・カヌー！そうカヌーです」

ヘス「レイクにカヌー？そんであんたがパドル？ずいぶんアウトドアな名前がそろったわにえ」

パドル「そう？ははは・・・」

ヘス「まあ、いいわ。友達を思っつてこんな嵐の中訪ねてきたんだもの。今日はもう遅いから寝ましょ。ベッドに案内するわ。ほらこつちこつち(あくび)」

別室に移動させようとするヘス。

パドル「いや、ヘス、いいよ。僕たちは今夜はここで」

ヘス「でも」

サファイア「大丈夫です。あ、パドルと少し話もしたいし。ね？」

パドル「え？あ、そうだね。そういうわけだからヘス。ありがとう。おやすみ」

ヘス「そう？・・・あ、じゃあスープを温め直そうか？女の子は体を冷やしちやいけにや
いからね」

パドル「ヘス！本当に大丈夫だから。ありがとう」

ヘス「・・・わかったよ、寝るよ。じゃ、風邪ひかにやいようにね」

ヘスが部屋を出て行こうとすると、ドアを強くノックする音。

ヘス「うん？誰か来た？」

ヘスが迎えに出ると、酔った様子で、いきなり抱きついてくるビーナ。

ビーナ「ヘス！」

ヘス「なにになに！？どうしたの？ビーナ！やめて、離して！ちよつと、ビーナ！」

ビーナ「ヘス、聞いて、あなたの言う通りだったわ！あの人、モンザが生き返ってきた
のよ！」

ヘス「なんだっちなえ？そんなことあるわけないだりよう！ビーナ、しっかりおし！」

ビーナ「嘘だというの？それじゃあ、紹介しましょう！私の最愛の夫、モンザ・ベルナー
ルド！」

M 「あの人のいない世界」

誰もいない、何も見えないヘス達。

ヘス「ビーナ、誰もいにやいよ・・・酔っぱらって幻でも見てるんだよ」

ビーナ「冗談はやめて、ヘス。ほら、彼が踊ろうって」

モンザにエスコートされたように踊るビーナ。

騒ぎを聞きつけて起き出してくるトト、ノア、金子・銀子。

モンザがビーナから離れて、部屋を出ていった様子。

ビーナ「モンザ、どこへ行くの？・・・ああ、そうね、一緒に行きましょう。ええ、怖く
なんかないわ、あなたと一緒になら。待って、今行くわ・・・モンザ・・・モンザ！」

何かを追いかけて、駆け出して出ていくビーナ。

パドル「まづい！飛び込むぞ！」

サファイア「なんだって！？」

慌てて追いかけるトト。

トトを追うパドル。

叫ぶトト。

トト「だめー！」

激しい雷鳴とたたきつける怒涛の波。

○嵐

眠っているジーナ。助けた際に怪我をしたパドルの面倒を見るトト。それを見つめるノア。

サファイア「しっかし、無茶するわぁ。あんたが追いついて捕まえなかったら、今頃この女も手紙屋さんも、海の藻屑だったね」

ルビー「死んだ男の亡霊でもいたのかしらね？」

パドル「いや、幻覚を見たんだろう。僕には最後まで何も見えやしなかった」

金子「それにしてもひどい嵐ね・・・」

手紙が届いたことを告げる音。トトだけに聞こえる。

トト「手紙だ」

パドル「え？」

ヘス「手紙が届くとトトにはわかるによよ」

手紙を取りに外に行くトト。

ざわつくパドルとサファイアたち。

手紙を持って戻ってくるトト。

ゆっくり手紙を、金子に差し出すトト。

金子「・・・わたし？」

トト「(うなずく)」

サファイア「なあんだ」

ヘス「なにが？」

サファイア「いや、別に」

開封して手紙を読む金子。次第に顔がほころび、しまいには高笑いを始める。

金子「やったわ！ついにやったわ！（高笑い）」

銀子「金子姉さん？・・・やったって、もしかして！」

金子から手紙を奪い取り、読む銀子。銀子も笑いだし、しまいには床を転がりまわり喜ぶ。

金子「父から返事が来たわ」

トト「・・・」

金子「わかったのよ。地下室の扉の鍵を開ける暗証番号が」

トト「金子さん・・・」

銀子「私たちね、お父様に手紙を書いたのよ。お父様の言う通り、遺産は全額、恵まれな
い人達に寄付しますって。だからそのためには、暗証番号を教えて下さいって。そうじゃ
なきや、寄付も何も出来やしないでしょ？」

トト「……もちろん、そうするつもりなのよね？金子さん？銀子さん！？」

金子「いいえ。たった今、気が変わったわ。遺産は1ペニーたりとも寄付なんかしない。
すべて私たち姉妹が使わせてもらうわ」

ヘス「嘘をついたね！あんたたち！」

金子「嘘じゃないわ！気が変わったの。だから仕方ないでしょ？」

銀子「そういうこと」

ヘス「あんたたち、最初から」

トト「ダメよ！ダメ……そんなことしたら、絶対何か起きる。ポストに出す手紙には、
本当のことしか書いてはいけないのよ！嘘や偽りを書いたりしたら、何が起こるかかわら
ない！そう説明したはずでしょ！」

金子「だったら何よ！私たちがどんな思いで生きてきたか、あんたたちにわかる？親に捨
てられ、大人の顔色ばかり伺って生きてきた、子どもらしく泣くこともままならなかつた
私たちの気持ちがあんたたちに分かるっていうの！？分かるわけない、分かるわけがない
じゃない！？」

トト「だけど……」

金子「行くわよ、銀子」

銀子「(強くうなづく)」

ヘス「せめて朝まで待ったら？この嵐じゃ、帰り着く前にどうなるか分かったもんじゃ」
金子「ありがとう。でもね、今出来る事は今する主義なの。幸運は待つてはくれないのよ。
ね？ノア」

ノア「!……」

金子「さようなら、世話になったわね。二度と来ないから、安心して」

トト「……」

金子「行くわよ」

銀子「了解」

喜びを叫びながら、嵐の中に飛び出ていく金子・銀子。

と同時にすさまじい落雷の音と二人の悲鳴。

大きなものが海に落ちた水音。

凍りつき顔を見合う面々。

トト「……なんてこと……」

ヘス「手紙に偽りを書いたら……ただでは済まにゃいのよ」

○真実

すると弱弱しくドアをたたく音。

ルビー「誰か来た」

弱り切った様子で家に入ってくるララ。駆け寄るトトに崩れかかるララ。

トト「あなた！」

ヘス「あらら？この人、この間」

トト「そんなことより、その椅子に座らせて！」

ヘス「たいへん」

トト「パドル、手を貸して」

パドル「……」

トト「パドル！……パドル？」

パドル「……母さん」

ノア「え？」

ヘス「母さん、って言った！？」

トト「……どうということ？パドル」

パドル「……」

意識を取り戻すララ。

ララ「あ……やっぱここにいたのね。サンチャゴ」

ノア「？……サンチャゴ？」

ララ「ええ、この子が先日お話しした、私の一人息子のサンチャゴです」

ヘス「よくわからにやいけど、どうしてまた来たりしたの？しかもこんな嵐の夜に」

ララ「急いでいたんです。どうしても止めなくちゃって……。ロバーニに聞いたわ、サンチャゴ。あなたが私の病のために、この岬を探しに出たって。“真実の中の真実”がポストに届く時、それを手に入れようとしてるって」

トト「パドル？この人は何を言ってるの？サンチャゴって……。あなた、パドルじゃないの？“真実の中の真実”を手に入れようとしてるってどういうこと！？」

パドル「ごめん、トト……。これにはわけが」
トト「いやだよ、パドル……。せっかく仲良くなれたのに……。あなたいたい……」

なにかに思い至ったヘス。

ヘス「余命1ヶ月」

ララ「……」

ヘス「自分が死んだあと、子供の事が心配だから、あの世から手紙を出す手続きを教えてください。この間に訪ねてきたによよ」

パドル「母さん、なぜ来たりしたんだ……」

ララ「私の命を救うために、あなたに罪を犯させるわけにはいかないでしょう」

パドル「でも、そんな体で……。すまない……」

サファイア「なるほどね。それでなんとしても手紙を手に入れて、一番最初に“真実の中の真実”を読む必要があったわけか。母親の命を助けるために」

パドル「そうだ……。だから手紙は」

ナイフを取り出しノアを人質にするサファイアとルビー。

ルビー「だけどここまで。手紙はあたしたちがいただきます」

サファイア「手紙が届くまで誰も動かないでね。そうすれば誰も傷つけたりしないから」
パドル「おい、やめろ！」

サファイア「おっと！動くんじゃないよ。このままだと“真実の中の真実”の力が、あなたの母上様のために使われそうだからね。悪いけど、あきらめるんだね」

ポケットから碧い手紙を取り出すノア。

ルビー「ちよっと、何してんの!？」

ヘス「それ・・・トトが握りしめてた手紙じゃないの。ノア、あんた、それ持ってたの？」

ノア「・・・トト・・・あの日、あなたが持っていたこの手紙に、何が書いてあったのか知りたくない？」

トト「姉さんは、知ってるの？」

ノア「知っているわ。はじめは意味が分からなかったけれど、何度も何度も読んだから」

トト「いったい何が書かれていたの？」

ノア「読むわね」

手紙を読み始めるノア。

ノア「20歳の夜に真実の手紙が届くだろう。そして、20歳の夜に、この子の命は尽きるだろう」

トト「わたし、死ぬの？」

ヘス「どうして今まで、黙っていたの？」

ノア「恐かったのよ。こんな手紙じゃないで、何度も破り捨てようと思ったけど・・・出来なかった。だって・・・これ、父さんの字だもの」

ヘス「え！亡くなったご主人様の」

ノア「(うなずく) トトは本当の妹じゃないけど、父さんが私に託したんだと思った。それに・・・」

ヘス「なんだい？」

ノア「まだ続きがあるの」

ヘス「読んで」

ノア「20歳の夜に、この子の命は尽きるだろう。しかし、20歳の夜に、真実の中の真実とともに妻となれば、その命は救われるだろう」

ヘス「妻？結婚すれば命は助かるってこと!？」

ノア「私ね、トト・・・あなたがいなくなったらいいって、考えてしまったの」

ヘス「ノア!？」

トト「・・・」

ノア「パドルが好きな・・・」

パドル「え・・・」

ノア「パドルがトトのことを好きなのは感じてた。だけど、トトがいなくなればもしかして私の事をつて・・・ごめんね、トト」

トト「・・・ノア」

ララ「サンチャゴ、お前はどなの？」

パドル「そんな、こんな時に・・・」

ララ「だけどこのままじゃ、この子の命は尽きてしまうのよ。好きなら考えている時間はないわ。真実の中の真実を手にして、この子を妻にしなさい。この子の命を救いなさい」

パドル「そんなこと出来ないよ！俺はみんなに嘘をついてた！騙してたんだ！そんな俺が今さら」

サファイア「あのさ、自分たちが手紙を手に入れる前提で話してんじゃないわよ！真実の手紙はこのあたしたちが」

懐から銃を取り出すララ。

ララ「黙りなさい！その子を話すのよ！」

床を狙いに1発撃つララ。

ララ「早く！」

あわてながらノアを解放するサファイアたち。

パドル「母さん、そんなものどこから」

ララ「護身用にロバーニに借りてきてよかったわ。それで、好きなの！？嫌いなもの！？はつきりしなさい！男でしょ！」

銃を突き付けられ

パドル「・・・好きだよ」

ララ「あなたは？手紙屋さん」

トト「・・・好きよ。嘘つかれてたのは許せないけど・・・でも！そんなことしたらあなたが死んでしまう！真実の手紙でああなたの命を救うために、そのためにパドルはこの岬まで」

ララ「いいのよ、手紙屋さん。人はいつか必ず死ぬわ」

パドル「母さん・・・」

手紙が届いたことを告げる音。

トト「手紙が来たわ」

手紙を取りに行くトト。ためらうトトをうながすララ。

手紙をパドルに渡すトト。

手紙を読むパドル。

ひざまずき、トトにプロポーズするパドル。

M 『Heart』心の奥の部屋

M 『碧の岬の手紙屋さん』

今日も天気の良い岬の庭。洗濯物を干すトト。
漁師になったパドルの船に、手をふるトト。
テーブルにはビーナ。

トト「パドルー！お魚いっぱい捕ってきてねー！」

ビーナ「幸せそうね」

トト「うん。ビーナは？」

ビーナ「幸せよ。この手紙のおかげでね」

トト「読んでいい？」

ビーナ「ええ。どうぞ」

トト「愛するビーナ。今まで返事を書かずにすまなかった。君の気持はよくわかっていたけど、僕はねビーナ、君には新しい人生を歩き出してほしかったんだ。僕の事は忘れて、また素敵な人を見つけて、幸せになって欲しかった。だけど僕が間違ってた。ビーナ、愛してるよ。ずっとずっと永遠に。そしてきつとまた会える。だからその時まで、人生を楽しんでおくれ。その方が、再会した時、思い出話がいっぱいできるだろう？君に出会えてよかった。素晴らしい人生だった。ありがとう、ビーナ。君の夫モンザより」

ヘスとノアが大荷物を抱えて帰ってくる。

ノア「ビーナ、来てたのね」

ヘス「なんか最近、集荷が増えちゃって。またヤチムンのやつこんなに」

トト「元気だった？ヤチムンさん」

ヘス「元気元気、トトはなぜ来ないってうるさくて」

トト「(笑)」

ヘス「それにしても、本当はあたしも読みたかったのよね、真実の手紙」

ビーナ「ヘスが？なんのために？」

ヘス「手紙を手に入れれば、やっと死ぬことが出来るかなって。でも仕方ないわね、家族も増えることだし。もうしばらく生きてゆくか」

お腹を押さえて照れるトト。

ビーナ「ヘス、あなたも恋をしたらどう？ただ生きてたって退屈でしょう？」

ヘス「失礼ねー！恋はしたわよー！それも世紀の大恋愛！ほんとにあと何年生きれば女神様は許してくれるんだろうな？」

トト「え？」

ヘス「いやいや、こっちの話ー！ところで、真実の手紙には、なんて書いてあったんだろうね？」

トト「それが教えてくれないのよ。でもこう言ってた。真実の中の真実は、読む者によって内容が変わるんだ。なぜなら、真実の中の真実は、その人の心の一番深い場所にある思いだから、って」

M 「祝祭」 合唱

